

# クマーリラのアポーハ説批判

山崎次彦

クマーリラはシュローカ・ヴァールティカに一章を設けて、一七六頌を以つてアポーハ説 *apoha-vāda* を批判している<sup>(1)</sup>。アポーハ説<sup>(2)</sup>は、推論 *anumāna* の対象である普遍 *saṃānya* は「他者の排除」*anya-apoha*、*nivṛiti*、*vyāvṛiti* によつて構成されたものであつて、「實在」*vastu* ではない、というのがその基本的内容であり、これを批判するクマーリラの理解もこの線上にある。クマーリラの批判は、概していえば、その前半では概念としての普遍を、後半では語の對象 *vācya* としてのそれを、「他者の排除」に關して取上げている。ここでは、その前半の概要をあとづけることにする。

かれは「排除」*apoha* を「非存在」*abhāva*、「非實在」*avastu* と理解<sup>(3)</sup>し、かかる「他者の排除」としての普遍をまず批判の對象とする。クマーリラはそれを、「排除を本質とするもの」*nivṛity-ātmā bhāvāḥ* は何か、という形で問題化している<sup>(K.2)</sup>。そして、この設問に對して、考えうる可能な三つの答を用意し、その何れもが「排除を本質とするも

の」ではありえないことを論證する。すなわち、(1)特殊なもの<sup>(4)</sup> *asādharaṇa* は「排除を本質とするもの」ではない。それは非構想的なもの *nirvikalpana* であるから。(2)個別的なもの *viśeṣa* もそれではない。譬えば、「非牛の排除」は牛一般であつて、個別的な黒牛等ではないのだから。(3)全體 *saṃudāya* もそうではない。全體の形相 *rūpa* はその類に含まれる全てが知られてはじめて把握されうるものであるから。以上によつて「排除を本質とするもの」のありえないこと、したがつてそのようなものとしての普遍の認め難いこと、が説かれた。クマーリラの立場では、普遍は全てのものにそれぞれ内在している *parinīhitā* 形相であり、かかる形相は非實在ではなくて、實在なのである<sup>(K.3-10)</sup>。

これには反論がある。それは、否定的概念を例示して、かかる概念は實在をではなく、非實在を表わす、というのである。

反論——ミーマーンサー學派でも、「非存在」*abhāva* の

概念を立て、これを未生無等に分析しているが、この「非存在」なる概念は「實在」とはいえないのではないか(K. 11a)と。

クマーリラは同じシュローカ、ヴァールティカカの「非存在」の章で、「非存在」は「存在」と共に、「實在」vastuの性狀 dharma である、とつづる(K. 19, 20)。ここでも、當然この見解の下に、未生無 prajābhava等の普遍は未生等によつて限定せられた有 satyaに他ならぬ、と答えている。(K. 11b~16)。

そこでアポーハ論者は、「非バラモン」abrahmanaなる概念を以つて、普通の非實在なることを論證しようとする。

反論——「非バラモン」なる概念は、クシャティリヤ等の個々のカーストを表わすのではない。なぜならば、バラモン以外のどのカーストをも表わしうるのであるから。しかし、クシャティリヤ以下のカースト全體を表示するものでもない。というのは、もしそうならば、シュードラもクシャティリヤも同じものになつてしまふからである(K. 13b-f)と。要するに、「非バラモン」という否定的概念は「バラモンの非存」brāhmaṇa-abhāvaを表わす(K. 15)のであつて、「非バラモン」という實體はどこにもないのであるから、この概念は非實在といえる、というのである。

クマーリラはこの反論につきのように答える。「バラモン」

という概念は直接には一つの特種のカーストを表わす、と同時に、間接的に「人間」puruṣatvaなる高次の類を表わす。

そこで、「非バラモン」は「人間」から「バラモン」を差引いて残つた「人間」を表わすのであるから、これも非實在ではなくて「有」satである(K. 18)と。さらに、かれは説く。或る種概念が否定されるとき、その概念によつて表わされるものの非存在が言われるのではなく、その種概念を包攝する類概念がその否定によつて制限され、否定された種概念を差引いて残つた類概念が表わされるのである(K. 24~28)と。

このゆえに、否定的概念も「非實在」とはいえない、と考える。また、動詞が否定される場合にも、聞き手はその動詞の表わす動作等のない人或は物等の「實在」を理解するのであり、教令 ootanaにおける否定は規律の一つとして人々に與えられた禁令なのであるから、何れの場合にも「非實在」が表わされるのではない(K. 13b~34)と。かくて、普遍は「他者の排除」として「非實在」であるのではない。普遍も對象的基體として實在を持たねばならぬ。クマーリラの場合、それはその類に含まれる全てのものに共通な形相であつた。そこで、もし對象的基體として絶対的特殊 antiya-viśeṣaを假定しても、それは本来非日常的な立場における假定であつて、それを正確に知ることができないのであるから、普通の對象的基體とは認め難い(K. 35f.)。要するに、「アポーハ

の語の表わすものは、空性 *śūnyatā* の異なる表現方法である」(K. 36 b) とする。

つぎに、觀念の形相 *buddhy-ākāra* は實在的な形相としての普遍であり、それが語によつて表わされるもの *vyūha* であること、したがつて、觀念は他の觀念を排除するものではなく、それ自體の形相をのみ生ずるものであることが説かれる (K. 38~41)。

また、アポーハ説においては、概念間の相互の區別が成立しないことを説く (K. 42 f.)。

普遍が「他者の排除」として非實在ならば、それは何等の具體的な内容規定をも持ちえないことになる。この點に基いて、クマーリラは、互に異なる類を表わす語と種 *visesa* を表わす語とが全て同義語とならう、と難する。この際、もしそれぞれの「他者の排除」に相互に區別がありうるとするならば、それらは區別されたものとして内容規定を持つてはならずであり、しかるときには、それらは實在といわるべきである。もし、また普遍が非實在ならば、内容規定がないのであるから、全ての普遍、「他者の排除」は全く同義とならざるをえない (K. 43~46)。

このクマーリラの論難に對して、アポーハ論者は反論を立てる。「排除の對象 *apohya* に區別があるのだから、排除の區別も成立しよう」(K. 47 a) と。そこで、クマーリラは、區

別が「排除」それ自體に基かず、排除の對象に基くとするならば、かかる區別は排除にとつては二義的或は附加的なもの *upacārika* にすぎない (K. 47 b) といひ、普遍が「明確に知られぬ、他との關係を斷たれた、他から制約されぬ、何の特殊な相をも持たない」そうした非實在であるとき、それにして區別が立てられようか (K. 48) と難する。

さらにかれば普遍の「他者の排除」を一應認め、そのとき普遍・概念の區別が排除の對象に基きうるか否か、を検討する。「牛」が「非牛の排除」であり、「馬」が「非馬の排除」であるとき、「非牛」は「馬と他の全動物」であり、「非馬」は「牛と他の全動物」となる。兩者を比較したとき、排除の對象に關して互に異なるのは「馬」と「牛」とのみで、「他の全動物」は兩者に共通である。そして、共通なものの方が異なるものより遙かに多いのであるから、排除の對象については、兩者は互に異るといふよりも、むしろ等しいとこそ言わるべきである (K. 49~50)。もし、この場合、共通なものより特殊なものの方が重要だと考えるならば、「牛」は「馬の排除」となり、「馬の排除」は「ライオン」等にも等しく言えることであるから、「牛」と「ライオン」等との間の區別が却つて失われることになる。かくて、排除の對象の區別による概念間の區別を假定することは却けられねばならぬ。ついで、「排除の對象」そのものの不成立が論證される。

排除の対象はその概念以外の全てであるというとき、(1)もしそれが個々の特殊の全ての形相を意味するのならば、(a)排除の対象は無限に多いのであるから、その一々の形相を知り盡せない。(b)それぞれが特殊の形相を持つてゐるのであるから、排除も特殊化される。(c)一つの場合の中に多くの概念が排除されるものとして含まれることになる。(2)また、もし排除の対象が一つの全體であるのならば、そのためにはその全體に共通な性狀 dharma が先に把握されてゐるのでなければならぬ(K. 58~72)。さうして追究される。「牛」の概念内容が先に成立してゐて、その否定の形である「非牛」が排除の対象である、ところがは無意味であるし、「牛」の概念内容が成立してゐないときには、「非牛」の内容も成立しえない。排除の対象そのものの成立し難いことが明かにされた(K. 82~85)。

以上のごとく、普遍は「他者の排除」を内容とする非實在ではなく、その類に含まれる個物に共通な形相としての實在であり、かかる普遍が觀念と語との対象である(K. 94)とクマールリは考へるのである。

- 1 The chowkhambā S. S., p. p. 566~614
- 2 Dignāga: Pramāna-samucchaya V, Dharmakīrti: Pramaṇavārttika I (K. K 42~187), Śāntarakṣita: Tatvasa-mgraha XVI, 金倉内照「印度精神文化の研究」三七〇頁以下

同、「佛教における言語の哲學的考察」(文化復刊3)、山口翁「有と無との對論」四八一頁以下、伊原照蓮、「陳那に於ける言語と存在」(哲學年報第一四輯)等參照。

- 3 vastu bhāva をそれぞれ「實在」「存在」と譯したが、クマールリラの場合、むしろ、前者に「存在」を後者に「實在」を當てた方が妥當のように見える。vastu が bhāva や abhāva を包攝する上位概念になつてゐるのであるから。拙論「Śloka-vārttika に於ける abhāva の概念(印佛研四の一)參照。
- 4 cf. ago-nivṛtiḥ sāmānyam vācyam yaiḥ parikalpitam/ (K. 1a)
- 5 cf. K. 15a—brahmaṇa-abhāvah sāmānyam syād-avastu tat/
- 6 svalakṣaṇa へ解してやうと思ふ。G. Jhā の譯は the specific (abstract) form といふ。
- 7 第六八頌に antya-paramāṇu の語が見える。G. Jhā は the final individual (atoms) と譯してゐる。
- 8 vikalpa, cf. samśīta-ekatva-nānatva-vikalpa-rahitam-anām / (K. 45 a).
- 9 Kimuta-avastv-asamsīṣtan-anyatāś-ca-anivartam/anavāpta-viśeṣa-amśa yat-kin-apy-anirūpitam//
- 10 tatra-ekasmin bhavet-piṇde nanta-jāti-samanveyah// (K. 59) 例へば「黒牛」の中で他の全つの牛と牛以外の全つの動物が排除されるものとして含まれてゐなければならぬ。(文部省科學研究費による研究成果の一部)